

第二回

親の症状としての子ども

未熟な精神分析家がおかす失敗

養子になった子どもは養父母に肉体的に似るためにはなんでもする

家族のセラピストとしての子ども

初回面接をどのように行なうか

参加者：子どもが両親の症状であるような場合に、子どもを治療にむかえ、両親のほうはべつの精神分析家におくるべきでしょうか？それとも一人の治療者が双方と個別に会うべきでしょうか？

F・D： 親のほうはべつの心理療法家に会いに行くべきです、さもないと、子どもの分析家の無意識のなかで、親があたかも子どもと双子であるかのように現れてくるでしょう。これはとても良くないことです。

かりにこの種の親が自分たち自身のために治療をうける必要があるとすれば、それは子どもを産んでからというもの、自らの太古の体験を子どもに転移してしまい、子どもを完全に混乱させてしまったからです。これはほんとうの関係ではなく、ひとつの転移関係なのです。このようなケースでは現実の両親が子どもをあいてに自分たちの過去を反復させることによって子どもと歪んだ対象関係を持っているので、精神分析家は親の話子ども側にたって聞く必要があります。そうすれば子どもが育っていくなかで日々どのような投影と向き合わなければならないのか、理解することができるでしょう。

しかしながら精神分析家は今日の教育というものにかかわっては絶対になりません、分析家はつねに過去の欲動と、かつての身体イメージにかかわるのです。治療者が存在するのはただ過去の転移を引き受けたり、今日の抑圧を「浄化する」ためにだけなのです。

患者のところに抑圧されたものをよみがえらせ、実際にそれを「浄化し」、昇華されなかった攻撃性をことばにして言うことができるようにすることがもちろん重要です。それによって患者は、治療の枠の外の現実の生活において、諸欲動の制止をやめて、それを昇華可能なものにすることができるのです。

そういう理由で、子どもの現実の環境を構成している両親が、わが子の健康の回復に直面するさい、援助が必要なことがあるのです。じっさい、両親は自分たちが子どものところに作り出した問題と、そうとは知らずに何年も直面しているものです。それで子どもの問題が消えてしまうと、彼らは苦痛という奇妙な状態に陥ってしまうのです。いぜんあったが忘れていた肉体的な苦痛だとか、あるいは夫婦関係にふたたび苦しむというような状態に陥ります。

もちろんあなたがたが親にむかって、子どもさんはあなたたちの症状なんですよ、と、

初回面接で言うことはできませんよ。学校でなにかやらかしているとか、身体に機能不全、つまり言語、動作性の障害や、拒食症、大便失禁、遺尿症、どもりなどのせいで、自分たちやまわりの社会がおかしいと判断した子どもを、親だって善意をもって連れてくるのですからね。精神分析家の役割は、したがってまずは両親を迎え入れることにあります。十分な時間をとってください、とくに初回はね。つづいて両親と子どもとどうじに会います、お互い自由に話してもらいます。最後に子どもと片方の親、つづいて子どもともう片方の親、というふうに会います¹。

もしほんとうに親の症状としての子どもの問題になっている場合、その事実は子どもから明らかにされます。子どもがこういう面談に興味を示さない場合部屋から出て行ってしまおうでしょうが、これは両親は自分たち自身の問題について気がつく助けになります。あるいはまた、子どもが両親をドアの向こうに追いやって、彼らを狼狽させることもありますが、この場合は彼が親に突きつけたこの突然の離乳と自立に耐えられるように、親たちのほうが援助を受ける必要があるのです。

そういう理由で、わたしはつねづね、われわれは子どもの精神分析家であるより先に大人の精神分析家でなければならないと、申し上げています。

もしわれわれがはじめから子どもの分析家としてやるならどうなるのでしょうか。生まれてからずっと投影されてきた苦しみ、これが子どもを両親の症状としているものですが、それが親のほうの治療の必要性を意味しているのだということを、理解できないでしょう。それからまた、ほんとうは子どもをとおして両親は自分たちの治療を求めに来ているのだということも、分からないでしょう。大人の精神分析家たちではなく、子どもの心理療法家たちのおおくがこう言うのを耳にしますが、これには驚いてしまいますね「かわいそうな子どもだ、あんなお母さんとお父さんといっしょで!」、「あんな母親からは子どもを解放しなくてはならない」、さらには「こんな奴は父親ではない」など。

こう言う人たちは親たちにたいする強い陰性転移を表明しており、治療者自身の不安を、したがってその家族と治療をすることができないことをあらわしてもいるのですよ。

行政官庁、その代表者たちのことですが、彼らは精神分析家ではありませんよね。そのため子ども相談を創設したのでした。社会に適応できない子どもを、親抜きでも治療可能だと彼らは考えたのです。

そのせいでいま相談所は窮地におちいつています。子どものためにつくられたにもかかわらず、われわれは子どもたちをケアできないでいます。

それは法律が子どもにたちする責任が両親にあるということを以前よりも遅くまで認めているだけに、いっそう奇妙な事態です。ご存知のように子どもたちは16歳までは働くことができないし、ならば家族の病理的な雰囲気から逃れる方法は非行にはしるしかないのですからね。

権力機関が親から子どもを引き離すこと、つまり、子どもを施設に入れたり親権を剥奪

¹ ここではとくに7歳以下の子どもについて話している。

することについて言えば、子どもとその子孫たちの人生にとって、つねに重大な影響をおよぼすということです。

親と子どもが別れて暮らすことの必要性を理解することができるのは、親と子どもがいつしよに、あるいはべつべつに、自分のための援助を受けてこそなのです。自発的に求めることができるような社会的援助の恩恵を被りながら、治療者たちに支えられながらね。でも家族の構成員以外の人物による決定に基づいてのことであってはぜったいになりません。

話をもどしましょう。子どもの心理療法家の多くがもつ、彼らが悪い両親と呼ぶところのものについてもつ、陰性転移の話をしてみましょう。

より分かりやすく説明するためひとつ例をあげてみます。子どもが面接に小さい車をもってきて、その車が壊れていると言ったとします。または人形をもってきて「いつもこの人形には困っちゃうの。彼女はベットでおしっこするし、みんなのこと嘔んじちゃうし、ぜったいに眠ろうとしないし食べようとしないの。」と言ったとします、あなたは車や人形を看病するつもりで、その子の親に言いましょう「べつの車、べつの人形を買ってあげてください。それからこの子は看病できないのですから、われわれはこれらのおもちゃをべつの子どもに預けますね！」

以上がおおよそ馬鹿げているとはいえ、先にあげたような治療者たちの善意にあふれた態度が要約されたものでしょう。しかし両親が神経症だったり精神病だったり、あるいはまた独身にもどって子どもをめぐって互いに対立しているような場合、彼らの投影のせいで病気になってしまった6, 7歳の子どもにとって、このような態度で接することは正しいのです。

7, 8歳以上の子どもについては何回か親子面接を試みれば、子どもが両親とはべつに自分のために援助されることを望んでいるかが分かります。両親のほうも精神分析家との面接のなかで、彼ら自身が援助される必要があることに気がつくことが多いです。分析家も子どもにたいするときとおなじように両親にたいして肯定的に接しなければなりませんよ。そのときには家族のメンバーのひとりとしか自分は治療関係を持ってないのだということを理解させる必要があります。一人の分析家が家族のメンバー複数の治療にあたるのは不可能なのですからね。

もし親のほうはまだ自分たちのために精神分析をするかどうか決めていないで、子どもだけが治療を受けることをのぞんでいる場合には、その子どもと治療契約を結ぶことが可能で、こういう場合、子どもはひとりで個人的な作業をすることができるのです。もしその子が社会のなかで自分の位置を見出すなら、この作業は両親を解放するような効果をもたらすでしょう。でも余波として不安ももたらすでしょうね。

さてそのようなときにこそ精神分析家は人間的な態度をとるべきで、両親を排除するような過激でかたくなな態度をとらないようにしなければなりません。子どもの治療がすすみだすと両親のころころにも副次的に心理的、性格的な問題が生じてきます。そのせいで子

ども自身が自分の治療者に、親の面接の要求にこたえてほしい、と言ってくるでしょう。

これは子どもを治療する施設で要求される、親子面談に等しいものです。

さてその場合は、子どもがいないところで親に会うというのは問題外です。ぎゃくに子どもがいるところで両親に会ったり、彼らが言うべきことをわれわれが聞いたりすることをさまたげるものはなにもありません。このような家族会議の機会にこそ、親たちは子どもの良い変化に気がつくのですが、それは彼らを苦しませるものです。あるいはまた、親はそのとき子どもが自分たちに期待している援助を理解し、それを与えることができないでいることも悟るものです。

精神分析家は双方がたがいに言っていることを繰り返し言ってみせて、分析家がいなくても家族で会話がもたれ、それが続いていくようにします。この点は重要です、というのは両親の承諾のもとで子どもと精神分析家との治療契約²が交わされるときには、子どもや親のおおくは、もう親子面談しに来なくなるからです。

あたかもその精神分析家が両親を教育者の立場から立ち退かせてしまったかのようです。

こういう親子面談のなかでこそ、いまの現実が治療者のおかげで親に完全に把握されるものなのです。(子どもと契約をうちたてたときには、親はこの現実というものを把握するにいたってなかったでしょう。)

だから教育者は両親であり、子どもにたいしてどういう態度をとろうが、なにを言おうが、まったく彼らの自由でありつづけるのだということを、くりかえし親に言いましょう。

じっさい、子ども相談が増えてきたせいで、治療は教育に置き換わるものである、と、親たちは信じこんでいます。だからわれわれ精神分析家のほうが状況をたてなおさなければなりません。子どもの治療が問題になっている場合には、教育カウンセラーや教育者のような役割を両親といっしょになってわれわれが演じないようにすべきです。はっきりさせておきますが、わたしが今お話しているのは7、8歳の子どもたちについてであり、個人的に精神分析的治療契約を引き受けた子どもたちについてです。

ときおり、転移のなかでのちょっとした出来事が、子どもに契約条件を忘れさせます。治療の初期に子どもと両親のまえではっきり説明されていたとしても、そういうことはあります。

両親の陰性の反応と不安によって親子面談が必要となるのですが、これは面接では持たない陰性転移を、子どもが両親に向けることが原因なのです。

まったくなんと多くの親たちが、この親子面談のさいに、われわれに言うことでしょう。子どもが家でなにか不愉快なことがあるたびにわめいて、「ぼくの分析家にいつけてやる！」と言うと。そしてその日われわれはそれを知るのですね。この脅迫的な、幻想的なことばのせいで、親たちは子どもにたいする反応に制止がかかるような感覚をもったのだ

² この契約は子どもが精神分析家に言うことについて守秘義務を分析家が守るということと、面接で起きていることがらについては両親は首を突っ込まないということとをふくんでいる。

ということが分かるのです。

子どもと治療するとき、われわれは誘惑の転移に気をつけなければなりません。これは子どもが幻想的にわれわれに両親の位置を占めさせようとする転移のことです。しかしこれはいったい既婚の男女がもつ転移と、それほど違うものでしょうか。彼らは自分とわれわれ治療者との関係についての幻想をもちいて、現実において自分の配偶者ともう関係をもたなかったり、あるいはまた精神分析家への愛の名のもとに自分たち夫婦関係を壊すことさえするのであります。

子どもとは、大人とするように、いや身体に必要な性器体制の実現がまだなのでありますから大人とする以上に、転移の名のもとで倒錯的な家族関係が築かれないように警戒しましょう。精神分析家との倒錯的關係と同様、警戒してください。

親のほうの話を分析で聞かさい、見過ごすことのできないほかの問題があります。両親が好きではない人たちに、子どもの姿かたちが似ている場合です。子どもにそれを言語化して言うことがとても大切になります。「お母さんが顔を見るのも嫌だという、某おばさんにあなたは似てるわね。だったらこのハンディキャップは乗り越えなくちゃね。目と逆毛と、顔が似てるかな。」ひとたびすべてそれらがことばにされてしまえば、それは現実になり、子どもはそれを受け入れて、うまく切り抜けていくものです。ぎゃくにもしそれらが言われぬままとどまるなら、子どもは自分を自分として感じられなくなるのです。体の箇所がある他者の身体のものに似ていて、感情的な理由でお母さんはそれを受け入れることができないのでありますから、子どもは自分の一部がすっぽり姿を消したようなかんじになってしまうのです。

養子の子どもたちにとって、これは無意識になされます。いわゆる血をわけた子どもではないというハンディキャップを乗り越えなくてはなりません。だから彼らは義父母に似るためならどんなことでもします。彼らが小さければなおさらです。

さいきん会った男の子はわたしにこう言いました。「分かるかな、僕はお母さんのお腹にいたことがないんで、お母さんは僕がお父さんにもっと似てほしいと思ってるんだ。お母さんはお父さんのこと愛してるからさ。」この子はエディプスのまっただなかで嫉妬していますが、うまいこと考えたものですね。彼がお父さんに似ようとしたのは父と張り合って母を所有するためなのです。部分対象による模倣すべてはうまくいっていました。チックや癖などの模倣が彼ができるすべてでした。それはまるで養父が生みの父親なのだと彼が信じているみたいだということに、精神分析家が彼に気づかせるまでつづきました。その子はただこう言ったのです「ふうん、もしそうなら、ぼくは彼みたいなチックをもつ必要はないんだね。」

そんなふうに張り合う必要はないのだと悟ったとき、すべては変わったのです。

血をわけた子どもであろうがなかろうが、子ども各自にとりエディプスの解決というのは、保護者であるお父さんお母さん、そのそれぞれにとっての快と欲望の対象に自分が同一化することをあきらめて、自分の自己同一性を引き受けることにあるのです。

子どもにたいする養父母の愛情は—自分の血肉をわけた子どもであるという知によっては「おもりされ」なかった愛情です—さらにいっそう子どもを窮地においこむ可能性があります。自分たちが小さかったときに実の両親にたいしてもっていた太古的な感情というものが、養子の幼年時代によみがえってきますが、じつの子どもがいたら体験するのとおなじようなやりかたでよみがえってくるのです。でもこれらはすべて幻想的なことです。

養子の無意識の要求、じつの両親よりも養父母にもっと肉体的に、目に見えてはつきりと似たい、という要求に相当するものが、養父母たちにも見られます。すべての希望をその子に託しているような養父母がいますね。名を永続させ、自分たちがささげた愛や努力が実をむすぶことをその子の運命としてしまう養父母がいるのです。

いわゆる思春期は、養子の子どもたちにとってはいっそう忘恩の年代で、かつそのことに彼らはいっそう罪悪感を感じさせられることもあるのです。

血をわけた子どもというのは両親の欲求から生まれた子どもですが、ときおり、すくなくとも意識的には、望まれた子どもではないことがあります。その子は発情した父と従属的な母の子どもかも知れません。でも養子の場合、社会が養父母たちを満足させる以前は、子どもは選ばれ、長い間待ち望まれた子どもであることは否定できません。

家族の一員になって以来、養子はあまりに大きな位置を占めてしまったために、家族から離れるときにはふたたび罪悪感に襲われるのです。それはじつの子どもが感じる以上の罪悪感です。

モーセの十戒のことば「あなたの父と母とを敬え」は、ちょっと認めがたいですね。それは両親への愛、人を依存的にする愛と、全面的に矛盾しているからです。

両親を敬うこと、それは子どもなりに立派になって、両親の名のもと人生において成功をおさめること、両親以上に成功したらもっとよい、というものです。この倫理的な教えは、それが吹き込まれていようがいまいが、みんなこころのなかにあるものです。でもこれは多くの場合、われわれ各自が両親に負っていると信じているものとは矛盾しているものです。われわれが乗り越えるに至っていない、依存という幼児的な愛のせいです。

年老いた両親への援助というものは、彼ら自身が老いたせいで自分たち自身を引き受けられないような場合には、子どもにとって幼年時代に自分が受けた援助への返答ともなります。ここでもまたわれわれがこれを依存という愛と多くの場合混同しているということを理解することが大切になってきます。この愛のせいでわれわれが自分の自己同一性に近づくことができなかつた場合には、この愛は憎しみにたいへん近いものになるのです。

つまり、つねに前性器期のわなというものが、これが性器期のあとの時期、つまり老年期にふたたび姿をあらわすということなのです。

あなたがたに注意をうながしておくべき最後の問題にうつりましょう。治療のあいだに子どもがこう言うことも起こりえます「先生はお母さんみたい。」。こういう場合は、かならずこう聞き返してください「いつのお母さんみたい?」。じっさい子どもは、2歳または3歳のときのお母さんをあなたに転移することはありますが、現在のお母さんではありま

せん。ご周知のように毎日子どもはお母さんを死なせてはあくる朝にはまたよみがえらせているのですから。もっともこれは子ども自身もおなじですが。過去のお母さんは死んだのです。だから子どもはだれかべつの人にそれを転移することが可能なのです。しかし今日のお母さんは生きていますから、その子がうまくやらなければいけないのはその現在のお母さんとなのです。

参加者： あなたがさっきほめかしたハンディキャップに話をもどします。不幸にもそれはいつも髪の毛の逆毛に要約できる話とは限りません。わたしは8歳の少女、ソフィーのことを思い出します。彼女は1歳半のときからわたしとセラピーをはじめた子で、二人の祖母によっておしつぶされている子です。若いお父さんお母さんはソフィーを一歳半まで、つまり二番目の男の子が生まれるまで、母方の祖母に平日は預けていました。この母方の祖母はソフィーのお母さんによれば奇妙でちょっと頭のおかしい人だということです。

ここから話がややこしくなるのですが、ソフィーの両親はソフィーは父方の祖母にも似ていると思っています、ただし悪い点が、とのことです。父方祖母とおなじでソフィーはあまり愛情をしめさない、一人でなにごともしやってしまうし、だれにもなつかないようなのです。わたしはこの子はふたりの祖母という二重の重荷を背負って、へなへなになってしまったのだと思うんです。だから両親にたいしてしつこく言っています「でも結局は、あなたたちが彼女のお父さんとお母さんじゃないですか！」。ソフィーのためになにか有益なこととして、わたしはなにができるでしょうか？

F・D： 子どもが母方祖母に預けられていたなら、今日のソフィーになるべく日々ソフィーが取り入れたのは、この母方のおばあちゃんです。そしてそれは偶然ではないのです。幼い娘のような彼女のお母さんと、幼い息子のようなお父さんが、そのおのおの母、つまりソフィーの祖母たちへの固着を解消していないせいなのです。

じっさい、この固着から解放されることができると思って、ふたりはとかげの技術を使ったのです。とかげは挟まるとその尻尾をのこして立ち去ることができるのです。若い夫婦はよく、最初にできた子どもたちを自分たちの母親にまかせて、自分たちは自分たちの生活をおくるものです。そうしないと母親は若夫婦にとっても嫉妬して、彼らがすることすべてを調査しかねません。それでもっとおとなしくなってもらうために、その口にいれるべきチューインガムを渡して、自分たち自身やっとならば母から解放されることができるといいうわけです。

参加者： しかしもしわたしの理解が正しければ、自分の母親に苦しんだ人なら、自分の子どもを彼女に預けるものでしょうか、確実に母が子どもをまた苦しませるだろうことが分かっているのに？

F・D： じっさいはすべてがこんなにはっきりしているわけではありません。でもみんな母親があわれなのです。そして子供は両親の心理療法家なのです。お母さんが生きることを許可してくれるように、奥の手を使うのです！それで最初の子どもを彼女に預けます。彼女は娘が子どもを持ったことだけでも、ものすごく嫉妬しているのですから・・・。

閉経をむかえたばかりのお母さんたちのなんと多くが、娘の妊娠についてがみがみ怒ることでしょう！だから娘のほうは頭をはたらかせるのです「お母さんは無給の子守として役に立ってくれそうだし、おまけに子どもの面倒もみるつもりでいるのだわ、それで彼女もおとなしくなるだろうし。そのあいだわたしは彼とゆっくりできるわね」。

これが悪いとは言えませんよ。もしこれが口にことばとして出されるなら、うまく行くでしょうね。子どもは毎日このような祖母を持ったことを利用するのです。ただ、この二人の関係が性愛的だということです。子どもが、祖母に預けられた娘か、祖父に預けられた娘かによって、ヘテロの関係かホモセクシャルの関係かに分かりますね。後者の場合は、挑発的、性愛的な関係であり、子どもにとって良くないのはそのためです。

ソフィーのケースでは、祖母はそんなに頭がおかしいわけではありませんが、ソフィーと性愛的ななにかを体験したのです。だからわたしはこの若いカップルは状況をよく考えて、子どもに話すべきだと思いますね。もちろんあなたともですよ。たとえばあなたソフィーにこう言えるでしょう「あのね、お母さんはあなたがおばあちゃんに似てるなど思っているの。でもけっきょく、お母さんにも似てるわよね、だってお母さんはおばあちゃんの娘なんだし、お母さんはとてもいい人になったんですものね！それからあなたはとくに、あなた自身に似ているのよ。それからお父さんやお父さん側の家族にもね。」耳にしていることから子どもたちは口にだされたことばによって解放されることが必要だと、わたしは思いますね。こういう方法によって彼らの重荷はたんに象徴的なものにすぎなくなるのであって、彼らからそのおもしろを取り除かれるのは口に出来ることばによってこそなのです。

口に出来ることば、これは人をもっとも解放するものであるとどうじに、人をもっとも殺すものでもあります。同様に、ことばによって、象徴的な重荷をさらに増すこともできるのです。

でもソフィーのケースの状況、これは祖母たちの独占欲です。ソフィーの親はあとになってそのことで祖母たちを非難していますが、それでもやはり、あまりに早く親になった彼らが成熟することができたのはそのおかげなのです。もしだれかべつの人物にお金を払って預けていたら、彼らは自分たちの責任を完全に引き受けることはできなかったでしょうし、母の攻撃性に耐えることもできなかったでしょう。母方祖母は若い娘、つまり自分の娘に同一化するという快でもって支払いをうける必要があったのです。それはソフィーを娘から部分的に誘拐することによってなされたました。ソフィーとは、祖母が娘婿とのあいだにできた自分の子どもであるという幻想を持てる子どものことなのです。

じつは、この母方のおばあちゃんは負債を自分の身をもって弁済しているのです、すべての親がその子どもに植えつける負債をね。それは子どもを育てるために払われた、自由の犠牲という負債のことです。

参加者： わたしは決定的な重要性をもつ初期の面接についてあなたにもう少し話していただきたいと思います、われわれの役割をちゃんと説明してほしいのですが。

F・D： じっさい、患者や子どもの親に、彼らがわれわれに期待できないものについて、きちんと理解してもらうことが大切です。心理療法家に会いにいくと、親はその人を教師とみなす傾向がよくありますし、したがって心理療法の授業を学んだり、あるいはたんに授業を受けようとする傾向があるのです。それからまた、特殊なタイプの医者だと思って、この医者は想像的または現実に彼らを不安にさせている症状を治すことに力を注ぐのだらうと思ったりします。社会に彼らの子どもが統合されないのは症状が障害になっているという理由によってです。まったく明らかなことですが、われわれの役割は、子どもの身体やその身体と他者との関係などとはまったくべつのことが問題なのだということを、両親に理解させることにありますね。

われわれは身体のふるまいに耳を傾けるのでも、その障害に耳を傾けるのでもありません。たとえこの身体の障害が医者によって精神障害として認められ、そのものとして治療を受けているとしてもです。それはわれわれの聞くことの領域に含まれてはいませんし、それが届くところにもありません。

ときどき精神分析家に、とくになかでも若い人に見られるのですが、あらゆる薬という薬のせいでぼおっとなっている子どもをみて、その薬を親がやめさせてくれるようにと願う人がいます。たぶんこの子にとっては残念なことでしょう、この医薬品の壁に守られているせいでほかの子たちと接触できないことはね。でもわれわれの役割はそれについて話すことではないのですよ。

われわれの態度はもっぱらあの象徴的な人間存在にかかわるものです。だからこれは分析家であるわれわれの去勢の問題です。

そのうえ、ある種の子どもにはじっさいに薬が必要で、その身体が生き延びるために獣医学的な援助が必要なのです。

ある小児科の女医を分析でみていたことを思い出します。彼女は真性てんかんの児童治療の専門家ですが、分析がすすむと子どもにたいする彼女の態度が変わりました。

変わってからは、5・6歳以上の子どもたちには自らの治療にたいする責任が完全に彼ら自身にあるということを、彼女は認めました。親のまえで彼女は言ったものです「あなたがたは子どもさんの治療にかかわる必要はありません。もしお子さんが治療されたいと望むならば、わたしがお子さんと薬の問題を解決するつもりですから。」彼女が親に求めたのはたんに、子どもが望むたびに毎回彼女に会いに来れるようにするか、彼女に電話でき

るようにすることでした。子どもにはこう言っていました「もし薬を減らしたくなったら電話してきてね。いいかどうかわたしが言いますから。もし減らしてしまって心配になったら、わたしに会いにきてもいいですよ。わたしが君にお願いする唯一のことは、ぜったいに勝手に薬を増やさない、ということです。」。

もちろん彼女は相談料をそのたびごとに要求はしませんでした、それに彼女は保険医です。

彼女はすばらしい結果を得たのでした。「わたしは必要最低限の薬を与えることに成功したんです、薬によって支えられているのではなく苦しんでいる場合、子どもは感じることをすべてを言うことが完全にできるのですから。」主体によってまちまちに発揮させる薬のもっている効き目について、彼女はこういうやり方で多くを学んだのでした。

これは親たちにとっても大きな一歩だったのです。諸欲求一薬は獣医学的な欲求に対応しています—と諸欲望とのあいだに、去勢を確立することができたのです。

この女性が理解したのは、人間には自分の身体について責任を持たせることが肝心だ、ということです。彼女は技術的には障害と薬に精通していたのですから。古典的な意味での心理療法は拒んでいましたが、彼女のふるまい方—子どもが自分と自分の不安とに耳をかたむけることができるようにするふるまい方—はセラピーのひとつの形なのです。

器質性の疾患ではないケースをまえにすると多くの医者は無能を示しますが、多くの場合それは驚くような表現をとります。たとえば多くの自閉症児たちについてわたしは思うのですが、彼らは検査上器官的な問題はなにも示さなかったにもかかわらず、医者は思考を麻痺させるような薬を彼らに詰め込んでしまうものです。

おなじことは耳が聞こえないわけではない子どもについても確認しました。彼らは聞くことを拒んでいるだけなのですが、医者は補聴器をつけさせるのです。治療者とほんとうのコミュニケーションが成立してからは、こういう子どもは補聴器をひっぱがすものですけどね。

参加者： われわれ精神分析家がある機関で働くような場合の、仕事の特殊性について、いくつか助言をいただけないでしょうか？

機関のなかで精神分析家として存在するというのは、ほんとうに問題です。あなた方の仕事は主体を主体自身に到来させることにあり、主体が矛盾のなかにあっても自らをもう一度見出す援助をすることにあるのだということを、つねに思い起こさなければなりません。そうしてはじめて主体はこころのまとまりを自分のなかにつくることができ、主体が存在するところではどこでも、みずからの名で語るができるようになるのです。たとえばそれがまわりの人たちを満足させないような方法だとしてもです。

CMP P³に子どもが送られる場合、子どもの行動のしかたが施設または家族をこまらせ

³ 医療教育センター

ているという理由によるのであって、その子自身は混乱した存在ではない、ということがよくあるのです。その子はとくに他人の投影を拒絶することを学ぶために支援される必要があります。それからまた、身ごもられたときの原光景に根づいた状態で、自己を確立することを学ぶための支援も必要です。たとえ操り人形のように行動することを求める人たちの命令にその子が譲歩してしまうとしても、ばらばらになってしまうおそれのあるその第一次ナルシズムを保護しなければならないのです。

こういう命令は情緒的な価値というものによって汚されているので、子どもがそれから解放されることをわれわれは援助しなければなりません。じっさい人生の価値以外に価値など存在しません。そしてその子はあなたに出会うところまで、生きるのに十分な力を見つけたのですから、あなたの支えをもって生きることを続けていく十分な理由があるのです。